

19 世紀後半における 孤児列車の人口動態分析

田 中 きく代

は じ め に

アメリカ合衆国において、1850 年代の中頃から 1920 年代末にかけて、民間慈善団体は、貧窮児童を救済する事業の一環として、東海岸の都市部から西方の農村部へ児童を移植した。これは、移動手段として主として大陸横断鉄道を利用したために、孤児列車と呼ばれた。都会の街角でたむろしていたり、児童救済施設に収容されていたりした子どもが選ばれたが、彼らは、西部開拓のための労働力需要に応えるために、西部の農民家庭へ委託された。

この孤児列車は社会福祉においてプレイング・アウトといわれる里親制度の始まりであると評価される。孤児列車はニューヨーク児童援助協会とチャールズ L. プレイス宣教師によって創設されたが、またたくうちに東海岸の諸都市に拡大した。児童援助協会の支部が設立されたのみならず、同種の慈善団体が設立されたり、既存の慈善団体が同様の方法を援用したりした。また、やがて、当初の移植先からさらに西方へ移植先が移動するにつれ、西方にも同様の援助協会が作られ、東部の慈善協会の地域滞在代理人の組織化も進んだ。ニューヨーク児童援助協会の場合は、彼らが孤児列車を実施した約 80 年間の間に、少なく見積もっても約 20 万人の子どもを西方へ移動させたといわれる。

この孤児列車には、東部におけるアメリカ的な慈善観や家族観を西部に移植し、孤児を通してアメリカン・ナショナリズムの一体化を試みた側面がある。孤児列車を通してアメリカ合衆国の 19 世紀ナショナリズムの展開を検証する

ことで、ナショナリズムと、ジェンダー、人種・民族、階級、世帯の交差する「場」を見極めることができる。実際、孤児列車は 19 世紀アメリカ史の諸相を包括している。孤児列車研究は、救貧法を問う社会福祉前史研究であると同時に、まず第 1 に移動した子どもによる子どもの歴史であり、子どもを取り巻く家族の歴史でもある。子どもの母親や移動した女兒にとっては女性の歴史でもある。第 2 に子どもの民族的背景や移動による同化とアイデンティティの形成を考察するという意味では、移民史・民族関係史の一こまでもあり、第 3 に東部の都市政策史であり、第 4 に西部のコミュニティの歴史であり、支援した人々の心性の歴史でもある。そして、第 5 に、なによりも、労働の担い手として認識され始めた子どもの労働移動の歴史である。

本稿では、孤児列車の全貌を検証する第一段階として、1854 年から 1917 年までの年次報告書の分析を主体に、その人口動態的分析を行いたい。年次報告書は、1905 年までは全てがそろっているが、その後は散逸しているものもある。20 世紀初頭以後の検証には限界があるが、少なくとも 19 世紀については、その全貌を見通すことができる⁽¹⁾。

I 孤児列車研究に見る社会改革説と社会制御説

研究史において、プレイシング・アウトという社会政策に、社会福祉史を含めて、歴史学が本格的に注目するようになったのは、1970 年代になってからである。施設収容の社会制御的性格が強調されると同じ文脈で、プレイシング・アウトやその他のブレイスの社会事業も解釈されるようになったからである。D. ロスマンは、19 世紀の施設収容による院内救済に注目して、19 世紀中葉に施設の処罰的な側面が強化されたことを強調し、それは社会改革ではなく社会制御であったとした。懲罰的で劣悪な児童施設では子どもの成長は望めない⁽²⁾と批判し、それを実践したブレイスを高く評価した。施設における社会改革的側面を否定するロスマンには、施設から子どもを解放した人物として映り、ブレイスは真の人道主義的社会改革家であると評価されることになった。

また、W. I. トラットナーも、施設という「閉じ込め」の壁から解放し、西方という社会上昇の機会を子どもに与えたこと、また予防的児童救済の方法を最初に採用したことで、ブレイスの社会改革者としての側面を評価している。しかし、同時にトラットナーは、プレイング・アウトが貧窮児童を都会から「根絶やしにする」ことであり、委託先の里親という代替家族にしても理想的な家族関係からは程遠かったことを強調している⁽²⁾。

こうした西方へ目を向けた解釈に対して、19 世紀の都市史に関心を抱いた P. ボイヤーは、都市部でのブレイスが実施した児童救済事業を検証し、社会改革者として側面を再評価した。そして、プレイング・アウトはブレイスの数多くの慈善事業のひとつに過ぎないから、都市部で彼が行った様々な慈善事業に対するひとつの選択肢として評価しなければならないとした。ブレイスは 1853 年から 1890 年まで事務局長職につき、死の直前まで自ら先頭になって児童援助協会の救済事業を実施したが、1894 年までに貧困階級の児童のために協会が支援した救済事業は、重要なもので 45 にのぼるといわれる。主だったものを上げると、21 の職業学校、13 の夜間学校、6 つの簡易宿泊所による救済がある⁽³⁾。

最近では、ジェンダー、人種・民族、階級、世帯の交差する「場」として、プレイング・アウトを社会史の視点からさらに広がりを持って捉えようとする研究が出てきているが、オーラル・ヒストリーの手法を駆使した M. I. ホルトは、ブレイスの理念と手法を詳細にたどることで、やや改革者の方に力点を置かざるをえなくなっているものの、折衷を図ることに成功しバランスの取れたブレイス像を示している。オコナーのような、ブレイスの理念的側面を強調し、彼の改革的側面を再評価する研究もある⁽⁴⁾。

また、ニューヨーク児童援助協会のような慈善団体で、篤志家のみならず手足となって働いたボランティアの人々にも注目される。トクヴィルも注目しているように、この時代はさまざまな連帯組織が作られ始めたときであったが、連帯組織を作りボランティアとして働いた人々には、男性のみならず多くの女性が含まれる。慈善事業は、ステンシルが主張するように、女性の活動がブル

ジョワ意識の確立に効を奏した面など、活動家のアイデンティティに触れるものでもあった。女性の男性とは異なる公共圏への政治参加の一コマであると捉えることができる⁽⁵⁾。

II 19 世紀後半における孤児列車の概容

ブレイスが 19 世紀の中葉に、プレイング・アウトを開始した背景には、20 年代ぐらいからの産業革命による構造的変化があった。40 年代末になると、多くの労働者の失業問題を見逃すことが出来なくなっていた。安価な移民労働力の導入は、問題をさらに深刻化させた。人口の 4 分の 3 を移民あるいは外国系が占めたニューヨーク市はこうした影響を最も強く受けたが、アイルランド人やドイツ人を中心とする大量の移民によって、特に、移民の最初の居住地区となった、ニューヨーク児童援助協会が設立されたファイブ・ポイント地区での貧困問題は抜き差しならない状況にあった⁽⁶⁾。

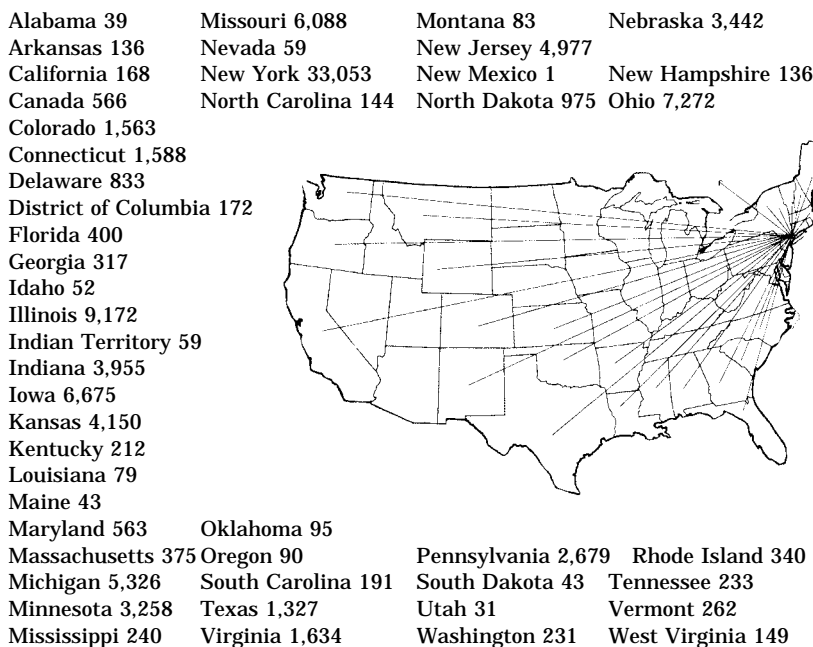
ところで、貧困の問題は子どもとも無関係ではなかった。むしろ子どもの場合の方が深刻ともいえ、貧窮者というマージナルな部分でも、子どもに注視せざるをえなくなった。貧窮により家族から切り離された子どもは、ニューヨークの街角にたむろし、夜はダンボール箱で寝泊まりすることになった。新聞売り、馬丁、靴磨き、配達人といった仕事を得ているものもいたが、物乞い、かっぱらいで暮らしを立てているものも多かった。

ブレイスは、こうした子どもたちに、宗教教育、実務教育などを施して、西方の有徳の家庭に移植させ、独立した自営農民として成人させ、理想的なアメリカ人を作り出そうとした。『ハーバース・マンズリイ・マガジン』には、その理想計画が子どもの成長過程として図示されている。この図は、その後、ニューヨーク児童援助協会の年次報告書の毎号の最後の頁に掲載されているし、西方の児童援助協会やその他の慈善団体の年報などにも掲載されている。児童援助協会の仕事を最も広く浸透させる媒体の役割を果たしている⁽⁷⁾。

さて、実際にニューヨーク児童援助協会によって、どれほどの児童が西方へ

委託されたのか。1910 年までの委託総数に関しては、児童援助協会が作成したものがあり、(図 1) に、それによる州別の委託数を示している。もっとも、ホルトが強調しているように、この総数は実際より低く見積もられたものであり、50 パーセントは上乘せされるべきであるが、20 世紀初頭までに、アメリカ合衆国のほとんどの地域に孤児列車が到達していることがわかる⁽⁸⁾。

図 1 1910 年までの州別委託数



By 1910, 47 states, Canada, District of Columbia and Indian Territory had taken children from the Orphan trains under the care and oversight of the New York Children's Aid Society. (Map from Orphan Train Heritage Society.

注 1：年次ごとの報告書には、アリゾナ 1 件が含まれる。

注 2：アメリカ合衆国とカナダ以外の委託先は除かれている。

Source: Jeanne M.Bracken (ed.), *The Orphan Trains: Leaving the Cities Behind* (MA, 1997), p. 9 による。

表 1 ニューヨーク児童援助協会による年度別委託総数

(人)

委託年次	1853- 1854	1854- 1855	1855- 1856	1856- 1857	1857- 1858	1858- 1859	1859- 1860	1860- 1861	1861- 1862	1862- 1863	1863- 1864
委託総数	207	863	936	742	733	779	814	804	884	791	1,034
少年	164	376	424	372	468	487	617	589	579	464	—
少女	43	422	393	265	200	230	164	167	223	305	—
成人男子	0	48	61	64	28	27	9	15	26	4	—
成人女子	0	19	58	41	37	35	29	29	56	18	—
委託年次	1864- 1865	1865- 1866	1866- 1867	1867- 1868	1868- 1869	1869- 1869*	1869- 1870	1870- 1871	1871- 1872	1872- 1873	1873- 1874
委託総数	1,235	1,450	1,664	1,943	2,263	1,930	2,757	3,386	3,462	3,701	3,985
少年	—	—	—	—	—	—	1,532	1,856	1,877	1,673	1,880
少女	—	—	—	—	—	—	728	887	1,068	1,460	1,558
成人男子	—	—	—	—	—	—	258	303	220	257	242
成人女子	—	—	—	—	—	—	239	340	297	311	305
委託年次	1874- 1875	1875- 1876	1876- 1877	1877- 1878	1878- 1879	1879- 1880	1880- 1881	1881- 1882	1882- 1883	1883- 1884	1884- 1885
委託総数	4,026	3,989	3,808	3,818	3,713	3,764	3,849	3,957	3,443	3,459	3,140
少年	1,853	1,633	1,782	1,767	1,920	1,895	1,799	2,167	—	1,940	1,889
少女	1,552	1,717	1,587	1,651	1,380	1,531	1,701	1,507	—	1,287	1,069
成人男子	263	325	190	173	210	132	128	101	—	86	75
成人女子	358	314	249	227	203	206	221	182	—	146	107
委託年次	1885- 1886	1886- 1887	1887- 1888	1888- 1889	1889- 1890	1890- 1891	1891- 1892	1892- 1893	1893- 1894	1894- 1895	
委託総数	2,876	2,974	2,721	3,551	2,851	2,825	2,621	1,940	2,266	2,059	
少年	1,684	1,630	1,643	2,210	1,866	1,619	1,589	1,033	1,036	1,019	
少女	886	956	723	977	699	789	648	626	832	716	
成人男子	108	132	128	132	73	126	122	107	139	109	
成人女子	198	256	227	232	213	291	262	174	259	215	

注 1：1869 年 2 月までは、報告書の年度の 2 月までの、1 年間の数値である。1870 年 11 月以降は、報告書の年度の 11 月までの、1 年間の数値である。

注*：1869 年 2 月から 11 月までの 9 ヶ月の数値である。

注-：数値が不明。

Source: *Annual Report of the Children's Aid Society, 1854-1863, 1870-1882, 1883-1892, 1893-1904, 1911-1917* より作成。

毎年の委託総数については、ニューヨーク児童援助協会の年次報告書によると、(表 1) のようになる。街角から集められた子どもの中から選ばれた者がそのほとんどである。大人もわずかであるものの、西方へ送られている。女性の場合は乳児の母親が多く含まれている。初期の段階の委託数は、比較的少数

であったが、やがて毎年 3 千人になるほどの大事業となった。児童援助協会の事業はすべて、教会関係、企業家、商人、あるいは個人の寄付でまかなわれていたし、プレイング・アウトは東部での救済費用を差し引いた範囲内で実施されていたので、委託は無限ではなかった。初期の段階では、3 人に一人という記述もあるが、児童援助協会の都市部での事業が拡大するにつれて、プレイング・アウトの比率は減少している。都市部で扶助を受けたものの総数と比較すれば、ごくわずかしき西方へ移動させていない。だから、プレイング・アウトは象徴的なものであって、都市部の事業を評価すべきという批判は誤ってはいないが、20 世紀初頭まで援助協会の事業の中心にあったのは、プレイング・アウトであり、都市部での事業には常に西方への可能性が背後にあった⁽⁹⁾。

委託数は、引率者の報告によると、だいたい、1 回に 5 人から 30 人であったが、時には 50 人もの大所帯になることもあった。また、多少季節によって相違はあるものの、1 年中継続して実施されてもいた。目的地に関しては、通常出発前から定まっていたようである。当初では児童援助協会の目的を述べた回状が国中に回されたことが、1854 年の報告書に見られ、2・3 ヶ月で 300 以上の、貧しい少年少女を育てたいという引き合いが、優れたビジネスマンや高徳な家庭から、さらに西部の家庭からも来ていると記されている。このように、当初は引き合いのあったところに連れて行ったというのが実態であったが、同様の援助組織が各地に設置され、しかも各地域で地域滞在代理人を雇用するなどのネットワークが張り巡らされていくにつれ、委託先との関係が密接になり、場当たりのものではなくなった⁽¹⁰⁾。

鉄道によって目的の町に着くと、児童たちは教会や役場や学校といった公共の場で一列に並べられ、選別された。将来の里親に選ばれる光景は、19 世紀の後半になっても、農場徒弟的な隷属的な労働形態が存在していたことを示しており、子どもの個別の将来に関心が払われたわけではなかった。また、子どもは全員が引き取られたかというそうではない。引率者の手紙や、子ども自身が児童援助教会に書き送った手紙、孤児列車経験者や子孫のナラティブな記

表 2 ニューヨーク児童援助協会による年度別地域別委託総数 (人)

委託年次	1853- 1854	1854- 1855	1855- 1856	1856- 1857	1857- 1858	1858- 1859	1859- 1860	1860- 1861	1861- 1862	1862- 1863
委託総数	207	863	936	742	733	779	814	804	884	791
ニューヨーク	—	265	357	308	214	159	316	193	159	227
ニューイングランド	—	228	255	103	84	30	29	30	12	13
東海岸中部諸州	—	290	277	98	56	32	26	34	46	48
東海岸南部諸州	—	31	10	6	6	5	7	1	0	0
中西部諸州	—	16	39	189	328	529	416	544	633	499
南部諸州	—	0	0	3	0	6	11	1	0	1
西部諸州	—	0	0	0	0	3	3	0	0	1
委託年次	1863- 1864	1864- 1865	1865- 1866	1866- 1867	1867- 1868	1868- 1869	1869- 1869*	1869- 1870	1870- 1871	1871- 1872
委託総数	1,034	1,235	1,450	1,664	1,943	2,263	1,930	2,757	3,386	3,462
ニューヨーク	—	—	—	—	—	—	—	549	879	1,197
ニューイングランド	—	—	—	—	—	—	—	134	189	90
東海岸中部諸州	—	—	—	—	—	—	—	195	268	332
東海岸南部諸州	—	—	—	—	—	—	—	14	3	21
中西部諸州	—	—	—	—	—	—	—	1241	1303	1119
南部諸州	—	—	—	—	—	—	—	296	424	316
西部諸州	—	—	—	—	—	—	—	98	276	295
委託年次	1872- 1873	1873- 1874	1874- 1875	1875- 1876	1876- 1877	1877- 1878	1878- 1879	1879- 1880	1880- 1881	1881- 1882
委託総数	3,701	3,985	4,026	3,989	3,808	3,818	3,713	3,764	3,849	3,957
ニューヨーク	1,248	1,387	902	1,743	1,584	1,702	1,303	1,837	1,924	1,916
ニューイングランド	108	130	73	59	76	84	84	59	45	55
東海岸中部諸州	345	234	153	120	160	109	93	68	129	198
東海岸南部諸州	95	44	166	66	99	191	159	116	131	137
中西部諸州	1115	1341	2043	1,312	917	873	751	771	804	880
南部諸州	217	423	318	278	439	282	208	151	295	100
西部諸州	219	200	230	214	249	342	372	436	182	296
委託年次	1882- 1883	1883- 1884	1884- 1885	1885- 1886	1886- 1887	1887- 1888	1888- 1889	1889- 1890	1890- 1891	1891- 1892
委託総数	3,443	3,459	3,140	2,876	2,974	2,721	3,551	2,851	2,825	2,621
ニューヨーク	1,632	1,889	1,649	1,296	1,048	1,025	1,481	903	999	1,079
ニューイングランド	51	65	69	57	33	84	162	84	60	48
東海岸中部諸州	41	52	21	54	98	134	104	84	90	36
東海岸南部諸州	124	98	158	148	236	95	183	151	115	64
中西部諸州	710	325	237	340	599	634	530	514	812	762
南部諸州	107	101	70	291	240	217	250	122	196	174
西部諸州	355	532	490	355	330	278	320	538	302	224

注 1：1869 年 2 月までは、報告書の年度の 2 月までの、1 年間の数値である。1870 年 11 月以降は、報告書の年度の 11 月までの、1 年間の数値である。

注*：1869 年 2 月から 11 月までの 9 ヶ月の数値である。

注－：数値が不明。

Source：Annual Report of the Children's Aid Society, 1854-1863, 1870-1882, 1883-1892, 1893-1904, 1911-1917 より作成。

録によると、里親に気に入られる子どもは、体が頑丈で直に労働に向く者であった。時には里親が見つけれないで、別の場所に連れていかれたり、東部へ連れ戻される場合もあった。また、里親が見つかった場合でも、ずっとそこにいられるとは限らず、新しい別の里親のもとにやられる場合もあった⁽¹¹⁾。

次に、年度別の州別の委託数を示す表 2 によって、年ごとの委託の地理的広がりを検証しておきたい。最初の 10 年間の初期にはニューヨークやニューイングランド、そしてドイツ人児童のためのペンシルバニアが主な委託先であるが、すぐにミシガン、オハイオ、イリノイ、インディアナに代表される中西部の諸州が取って代わっている。これは、ひとえに労働力を必要とした地域の農民の要請によるものであり、孤児列車がその後も西方を主たる委託先としたことは事実である。しかし、同時に 19 世紀の終りになっても、ニューヨーク州あるいは近郊の諸州、また東海岸の諸州への委託も多い。表では 19 世紀末までしか示されていないが 20 世紀初頭になっても、ニュージャージーやヴァージニアは特に顕著である。近郊への委託にはまた、マサチューセッツで大人の場合に見たような強制送還が、子どもの場合にもごく一部ではあるが実施され、プレイシング・アウトの一環として、子どもが実質的にヨーロッパやカナダにも送還される事例にも注目される⁽¹²⁾。

III プレイシング・アウトの民族的背景と家族構成

次に、最初の 10 年間に委託された子どもの民族的背景を検討し、プレイシング・アウトが持つ同化の前提となる外国系の実態を把握したいが、それは、(表 3) にまとめられている。アメリカ生まれ、アイルランド生まれ、ドイツ生まれ、ブリテン生まれがほとんどを占める。スウェーデン生まれも多い。民族性が不明の者も最も大きい範疇のひとつであり、アメリカ生まれの者ととともに、その民族的背景を報告書では把握しえない。しかし、ブルンナーの委託児童の半分以上は移民だという指摘を待つまでもなく、政府報告書に示される施設収容児童の民族構成や貧困地域の民族的差異を考慮すると不明の者の多くは

表 3 ニューヨーク児童援助協会による年度別人種・民族別委託総数

(人)

委託年次	1853- 1854	1854- 1855	1855- 1856	1856- 1857	1857- 1858	1858- 1859	1859- 1860	1860- 1861	1861- 1862	1862- 1863
委託総数	207	863	936	742	733	779	814	804	884	791
アメリカ生まれ	—	143	282	259	258	425	456	502	446	334
アイルランド出身	—	227	379	141	146	115	177	145	162	52
ドイツ出身	—	201	225	162	115	130	95	68	98	24
ブリテン出身	—	52	36	63	73	67	21	45	65	17
北欧出身	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他旧移民	—	4	5	5	12	3	3	5	3	3
南欧出身	—	0	0	0	14	8	0	5	2	1
東欧出身	—	0	1	0	0	0	0	0	0	0
その他の出身	—	13	2	5	4	1	0	0	3	3
出身地不明	—	220	10	105	109	29	59	34	105	357
委託年次	1863- 1864	1864- 1865	1865- 1866	1866- 1867	1867- 1868	1868- 1869	1869- 1869*	1869- 1870	1870- 1871	1871- 1872
委託総数	1,034	1,235	1,450	1,664	1,943	2,263	1,930	2,757	3,386	3,462
アメリカ生まれ	—	—	—	—	—	—	—	197	1,124	1,368
アイルランド出身	—	—	—	—	—	—	—	131	1,058	852
ドイツ出身	—	—	—	—	—	—	—	548	375	494
ブリテン出身	—	—	—	—	—	—	—	87	255	362
北欧出身	—	—	—	—	—	—	—	0	127	199
その他旧移民	—	—	—	—	—	—	—	1	19	45
南欧出身	—	—	—	—	—	—	—	0	3	7
東欧出身	—	—	—	—	—	—	—	8	1	0
その他の出身	—	—	—	—	—	—	—	7	10	5
出身地不明	—	—	—	—	—	—	—	538	414	130
委託年次	1872- 1873	1873- 1874	1874- 1875	1875- 1876	1876- 1877	1877- 1878	1878- 1879	1879- 1880	1880- 1881	1881- 1882
委託総数	3,701	3,985	4,026	3,989	3,808	3,818	3,713	3,764	3,849	3,957
アメリカ生まれ	1,576	1,866	1,509	2,294	2,033	2,083	2,032	1,884	1,814	2,051
アイルランド出身	626	657	921	583	654	611	585	794	852	688
ドイツ出身	607	879	965	711	853	742	537	716	720	751
ブリテン出身	357	314	306	147	85	134	105	149	174	225
北欧出身	145	29	129	140	59	135	89	116	121	123
その他旧移民	45	58	43	5	8	18	27	10	33	2
南欧出身	18	13	2	1	3	64	2	2	3	3
東欧出身	64	81	151	88	112	24	130	86	128	104
その他の出身	0	2	0	7	1	0	0	6	4	7
出身地不明	263	86	0	0	0	0	189	0	0	0

(次頁に続く)

表 3 ニューヨーク児童援助協会による年度別人種・民族別委託総数（続き）

委託年次	1882- 1883	1883- 1884	1884- 1885	1885- 1886	1886- 1887	1887- 1888	1888- 1889	1889- 1890	1890- 1891	1891- 1892
委託総数	3,443	3,459	3,140	2,876	2,974	2,721	3,551	2,851	2,825	2,621
アメリカ生まれ	1,812	2,438	1,754	1,451	1,444	1,243	1,626	1,455	1,086	1,132
アイルランド出身	701	480	614	334	284	222	326	244	162	163
ドイツ出身	602	250	450	465	531	502	711	507	613	509
ブリテン出身	114	99	170	280	268	267	339	245	165	120
北欧出身	163	77	44	79	84	86	85	63	22	33
その他旧移民	20	12	0	13	15	0	20	6	18	4
南欧出身	0	8	41	25	16	28	28	13	30	28
東欧出身	37	100	67	224	291	354	404	296	673	574
その他の出身	0	0	0	5	10	4	12	15	33	58
出身地不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注 1：1869 年 2 月までは、報告書の年度の 2 月までの、1 年間の数値である。1870 年 11 月以降は、報告書の年度の 11 月までの、1 年間の数値である。

注 2：1850 年代には、10 名の黒人、7 名のユダヤ人の委託が分っているが、他は不明。

注＊：1869 年 2 月から 11 月までの 9 ヶ月の数値である。

注－：数値が不明。

Source: *Annual Report of the Children's Aid Society, 1854-1863, 1870-1882, 1883-1892, 1893-1904, 1911-1917* より作成。

アイルランド生まれやドイツ生まれであろうし、アメリカ生まれにしてもアイルランド系やドイツ系を多く含むと考えられる⁽¹³⁾。

また、黒人の児童が少ないのは、当時のニューヨークにおける黒人の相対的人口が少ないからではあるが、ひとつには黒人の相互扶助のネットワークが存在していたからだとか、大きな意味で奴隷制が飲み込んでしまっていたとかの説明がされる。だが、同時に里親の方に強い偏見があったことも否定できない。実際、ニューヨーク児童援助協会が実施した職業学校のうち、史料で確認できるのは 1911 年以降であるが、ひとつだけが黒人の子どもの収容を主としている。このハリエッタ職業学校の黒人児童の収容数は顕著で、毎年数百人にのぼっている⁽¹⁴⁾。

移民系では、1880 年代になると、カトリック教徒の移民、イタリア生まれの者や、ポーランドを含め多くの東欧系のものが増加する。オーストリア・ハンガリーからの移民も多い。当時の移民潮流として多くのユダヤ人の子どもも

含まれるが、それを識別する史料は、経験者たちの記憶以外にはない。その他、カナダへの委託も顕著になる。また、人数的にはごくわずかであるが、アジア、オーストラリア、地中海地域の諸国からの子どもが委託された例もみられる。

ホルトの主張するように、ブレイス自身に、アメリカ人となりえる者は西欧出身の旧移民であるという偏見が強かったという主張はおそらく正しいのであろうが、委託された子どもの数を見る限りでは、新移民の委託数も少ないわけではない。確かに、1854 年の第 1 回年次報告書で、子どものうちに救済しなければ間に合わないとするくだりで、これらの貧窮児童は、「野蛮人やインディアンと同じように」、モラルの欠如の中で育っているが、我々と同じ権利を持つ子どもであるとブレイスが語っているように、人種への根強い偏見と同時に、新移民よりも旧移民への偏重も垣間見える⁽¹⁵⁾。

しかし、問題は、ブレイスあるいは児童援助協会の、人種的・民族的偏見そのものにあるのではない。理念的にはあらゆる宗派・教派を区別せずにとブレイス自身が述べているように、貧困というマージナルな世界におけるマイノリティを、マジョリティ側から同一化する視線は、マイノリティの階級的差異と文化的差異を理解しないで、単線的にアメリカ化を促進させようとするものである。もっとも実際のところは人種・民族的あるいは宗教的背景を配慮する余裕を持たなかった側面もある。

ブレイスのプレイング・アウトは、やがて民族的・宗教的アイデンティティの摩擦を生み、マイノリティ側の筆頭であるカトリック教徒から厳しい批判がブレイスに浴びせられた。カトリック教徒からの反発は、彼らにニューヨーク・ファウンディング・ホスピタルを設立させ、彼ら自身によるプレイング・アウト「ベビー・トレイン」を実施させたが、プロテスタントのニューヨーク児童援助協会による扶助対象者の中で、カトリック教徒、ユダヤ人の数が減少することはなかった⁽¹⁶⁾。

性別と家族構成についても追記しなければならない。表 2 のように、プレイング・アウトの歴史を通じて 4 割近く、時には 5 割近くが少女であった。

西部で少女は農作業よりは家事手伝いなどに望まれたが、19 世紀後半の西部の人口構成を考えれば、委託された少女の比率はかなり高率といえ、西方での女児労働の重要性、ひいては女性人口の少なさによる需要の大きさが窺える⁽¹⁷⁾。

もっとも、都市の児童施設収容者の少女比率よりも、この委託比率が下回っているから、ホルトの主張するように、ブレイスの少女に対する偏見がブレイシング・アウトにおける少女比率を下げたことも事実だろう。また、委託契約書に少女に関する取決めが特に記載されていないという事実は、当時の女性に対する心性を探る上で重要であろう。しかし、少年、特に新聞少年に関しては自助能力に期待して、有能な少年を峻別したと同様に、少女に対しても同じくロッジング・ハウスを設立している。貧困が少女に与える弊害を是正するために、男子以上に児童援助協会が努力したことは、評価される。必ずしも少女の更生により多くの希望を持っていたことを示すとは限らないが、社会的差異は考慮しても、純粋に性差をブレイス自身が意識していたとはいえない。ただこの点においては、ニューヨーク市での少女への事業を分析し、ブレイスの少女への目差しを考察する課題が残る⁽¹⁸⁾。

お わ り に

本稿は、19 世紀のニューヨーク児童援助協会によるブレイシング・アウトを、第 1 段階として、主として年次報告書を分析しながら、人口動態分析による全容を提示した。次の課題は、ブレイスの理念上の変化や、経験者たちの手紙の分析を必要とするが、ことに 19 世紀後半になると、出世して州知事になったものなどが例示されて、ブレイシング・アウトを礼賛する傾向が出てくるので、その過程をたどらなければならない。また、本稿では、ブレイシング・アウトが「孤児列車」と称されながら、その割には孤児比率が低いことに触れえなかった。家族関係不明の者の比率も高いが、それを除いての孤児比率は、最初の 7 年で 33.3 パーセントであり、両親ともに生存している者や母親

のみが生存している者の比率が多くを占めている。世紀転換期になると、孤児比率は高まるが、それでも浮浪児童や救貧院の児童が元より孤児ばかりであったわけではない。母親が救貧院で産んだ場合を除いても、児童に親がいなかった場合は少数派である。ここにブレイスが法的な養子制度にまで踏み込めなかった理由があるので、委託先の諸州での実態分析を必要とする。

注

- (1) *Annual Report of the Children's Aid Society, 1854-1863, 1870-1882, 1883-1892, 1893-1904, 1911-1917* (以後 CAS と略記) ; *First to Fifteenth Reports of the Boston Children's Aid Society, 1863 to 1865* ; Annette R. Fry, *The Orphan Trains* (New York, 1994).
- (2) J. Rothman, *The Discovery of the Asylum: Social Order and Disorder in the New Republic* (Boston, 1971) ; Walter I. Trattner, *From Poor Law to Welfare State: A History of Social Welfare in America* (NY, 1974) ; Kristine E. Nelson, "The Best Asylum: Charles Loring Brace and Foster Family Care," Dissertation, Univ. of California, Berkely, 1980 ; Bruce W. Bellingham, "Little Wanderers": A Socio-Historical Study of the Nineteenth Century Origins of Child Fostering and Adoption Reform," Dissertation, Univ. of Pennsylvania, 1984.
- (3) Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920* (Cambridge, 1978) ; CAS, 1890, xi-xx ; Marilyn Irvin Holt, *The Orphan Trains: Placing out in America* (Lincoln, Nebraska, 1992), 42-3, 80-117.
- (4) *Ibid.* ; Stephen O'Connor, *Orphan Trains: The Story of Charles Loring Brace and the Children Whom He Saved and Failed* (New York, 2001) ; 拙稿『南北戦争期の政治文化と移民——エスニシティが語る政党再編成と救貧』(明石書店, 2000 年) 282-320 頁。
- (5) Christine Stansell, *City of Women: Sex and Class in New York, 1789-1860* (Illinois UP, 1982) ; 拙稿「ジャクソニアン期からアンテベラム期にみる女性の公的領域—参加的民主主義論からの射程」『人文論究』(関西学院大学) 第 52 巻 4 号 (2003 年)。
- (6) Edward K. Spann, *The New Metropolis: New York City, 1840-1857* (NY, 1981) ; Tyler Anbinder, *Five Points* (New York, 2001).
- (7) Anthony M. Platt, *The Child Savers: The Invention of Delinquency* (Chicago, 1969) ; Sonya Michel, *Children's Interests and Mothers' Rights: The*

- Shaping of America's Child Care Policy* (New Haven, 1999) ; *Harpers's New Monthly Magazine*, August 1873 ; Timothy A. Hasci, *Second Home : Orphan Asylums and Poor Families in America* (Harvard, 1997).
- (8) Jeanne M. Bracken (ed.), *The Orphan Trains : Leaving the Cities Behind* (MA, 1997), p. 9 ; Paula S. Fass and Mary A. Mason (eds.), *Childhood in America* (New York, 2000), 359-66.
- (9) *CAS*, 1854, 8, 24-5 ; 1856, 54-60.
- (10) *Holt*, 41-79.
- (11) Mary E. Johnson (ed.), *Orphan Train Riders : Their Own Stories*, 4 vols. (Baltimore, 1992-7) には、ナラティヴな記録が収められている。Janet Liebl, *Ties that Bind : The Orphan Train Story in Minnesota* (Minnesota, 1994) ; Matthew A. Crenson, *Building the Invisible Orphanage : A Prehistory of the American Welfare System* (Harvard, 1998) ; Viviana A. Zelizer, *Pricing the Priceless Child : The Changing Social Value of Children* (Princeton, 1984), 171-84.
- (12) *Report of the Special Joint Committee Appointed to Investigate the Whole System of the Public Charitable Institutions of the Commonwealth of Massachusetts, 1858*.
- (13) Robert H. Bremner et al. (eds.), *Children and Youth in America : A Documentary History*, vol.1 (Harvard, 1970), 435-77.
- (14) *CAS*, 1900, 45 ; 1911, 81-83.
- (15) *Holt*, 69-71 ; *CAS*, 1854, 13-4.
- (16) George P. Jacoby, *Catholic Child Care in Nineteenth Century New York* (D. C., 1941) ; Carolee R. Inkeep, *The New York Foundling Hospital* (Baltimore, 1995).
- (17) *Holt*, 64-5 ; Linda Peavy and Ursula Smith, *Frontire Children* (Oklahoma, 1999).
- (18) New York Children's Aid Society (ed.), *The Children's Aid Society of New York : Its History, Plan and Results* (New York, 1893).